

伊藤 誠(東京大学(名))

マルクス価値論と転形問題の再考—F.モウズリのマクロマネタリー理論によせて—

(この報告希望は、本記念シンポの CFP を松本朗委員経由でえた Fred Moseley 教授からの報告希望の提案を受け、経済理論学会会員の森本壮亮、佐々木隆治、斎藤幸平、吉村信之の諸氏ともはかり、A Dialog on Marx's Value Theory and the Transformation Problem というタイトルの分科会を一、二企画したいと相談をすすめた経緯にもとづいています。)

「マルクス価値論と転形問題の再考—F.モウズリのマクロマネタリー理論によせて—

伊藤 誠(東京大学(名))

(1) モウズリの解釈についての論評

F. Moseley, Money and Totality: A Macro-Monetary Interpretation of Marx's Logic in Capital and the End of the 'transformation Problem (2016)は、欧米のマルクス理論家のあいだに生じてきた転形問題に関する「新解釈」ないし「単一体系解釈」の流れを総括し、マルクスの生産価格論とその基礎となる価値論および剰余価値論との整合性を論理的に再考する試みを示している。そこには、宇野理論にもとづく私の見解と共通する特徴が、①貨幣形態の重要性、②『資本論』1巻と3巻の理論的課題の相違、③その両巻の単一体系としての解釈、④マルクスの総計二命題の基本的妥当性、などにわたり読みとれる。にもかかわらず、ともに検討をすすめなければならないいくつかの問題も指摘できる。①価値概念の基本はなにか、②単一体系としての解釈で等労働量交換としての価値価格の妥当性をいかに理解すべきか、③金本位制のもとで金産業をふくむ利潤率均等化法則はいかに理解されるべきか、④抽象的人間労働の同質性は複雑労働をふくめ、理論的にどのように解釈しうるか。

(2) 金産業についての価値と生産価格の法則

金本位制が想定されている『資本論』の価値の生産価格への転形問題をめぐり、ボルトキエヴィッチとスウィージーにはじまる従来の標準的解釈も「新解釈」以降の単一体系的解釈も、それぞれに貨幣商品金を価値の実体としての労働量と価格としての価値の形態をつなぐ結節点として重視してきた。モウズリは、貨幣商品の金には生産価格が成立しないと解釈しているが、一般物価の逆数にあたる金の交換価値、ないし物価水準の決定原理をどう理解するか、金鉱の鉱山地代の役割もふくめ、再考すべき問題が残されているのではないか。

その延長上に、金兌換停止後の変動相場制のもとで、通貨供給が大幅に増大しているにもかかわらず、デフレスパイラル的な物価の低迷が長期構造的に続いている現代資本主義世界の論理をどう解釈すべきかも解きあかしたい問題をなしている。

(3) 労働価値説の平等主義的再解釈に向けて モウズリのマクロマネタリー理論は、国民所得統計と労働価値説との関連を概算的に読みとりやすくする効果をともなっている。そのさい複雑労働をいかに単純労働と均質な抽象的人間労働と評価しうるか。伝統的な三解釈に論評を加えつつ、より平等主義的な再解釈を提示して経済民主主義のマルクスによる根拠

を強化する理論的試みを示唆してみたい。